

或はあの星の世界にか、
そんな遠くではあるまい。
もつとづうと近くだ。

俺達と同じ處だ。

オ、草よ、愛する緑に萌えたつ草よ
御前と俺達位よく調和するものはない
人は何と云はうと俺はさう考へる。

清い水を吸つて同じ脊丈に伸びてゐる草よ
地上にひろがる虹色の草よ。

麥 畠

麥よ、至る處にある麥よ

御前達は實に美しい。

黄い麥や青い麥、赤い麥や緑の麥

清らかな空氣の中に透きとほつて明るい

御前達はまるで虹が懸つたやうだ

杳か遠くまで村から村へ延びてゐる

やがて蒞られて消えてしまふ地上の虹だ。

京 都

京都よ

御前は美くしい

山々に囲まれて河があつて

やさしくて、なつつこい

俺は旅行で急がしく

二三度寄つただけだ。

舞妓も、都踊りも

名所舊所も知らないけれど

俺は好きだ

のんびりしたところ

コセくしないところが好きだ

御前は女性的の感じだか俺は好きだ

京都よ、日本の京都よ。

妹に

一八四

俺の居所が分らなくつて

心配してゐる妹よ

許してくれ

許してくれ

俺は御前の事を忘れてゐた

忘れてゐたのではないけれど

此間菓子を送つておあげなさいと

妻からすゝめられて

その氣でゐ乍ら果たさずゐた。

御母さんも便りをしない由

さぞ淋しかったらう。

心細かつたらう

二人とも揃つて御無沙汰して。

俺は達者で、元氣だ。

喜んでくれ

御前の元氣も祈る

御母さんも御元氣だ

會ふ度ひに皆んなの側へ行つて

話をしたがつてゐる。

手紙をかゝないのは急がしかつたのだらう

引越しても黙つてゐて本當に悪かつた

だが心配してくれて喜んだ。

妹よ

手紙も出す

菓子も送る

安心してくれ

一八五

俺は元氣だ。
御前も元氣でゐてくれ。
祈る。

自信

自信をもて、自信をもて
云ひ譯は凡て醜い。
云ひ譯をしなくてはゐられなくても
自信は失ふな
ころんだら起き上れ
決して自信を失ふな。

小景

一八八

河原へ行くと

突然風が吹き起つて兩岸の木々や竹藪が動揺し
空には東西南北から一團りづつ大きな雲が
陣を張る様に連つて湧き出し

一刻々に自然は憂鬱の姿になつた。

遠い七つ八つの山は夕立に會つてゐる様に

靄に包まれてしまつた。

自分の足音に驚いて河原から

鳩位の燕のやうな名も知らない珍らしい鳥が二羽

方向をちがへて飛び立つて

自分の上で呼び交し乍ら離れずに啼き迷つてゐる
餘り悲しい聲なので

その邊に巢があるのかも知れないと思つて
見廻して見たが何にもない。

二羽の鳥は亂れる雲の下を飛び迷つて

餘程驚いたものと見えて

烈しい悲しい聲で啼く。

その聲は雲に衍して自分は不安になつた。

つい子供の頬を突つて泣きだされた人の様に、

自分は悲しくなつて引返へした。

風は勢ひを増し、雲は湧き出し

今にも何か恐ろしい事が起り相になつた。

山の上から

一九〇

山へ行け、

山へ行け

山へ登つて自分達の住んでゐる

下界を一目見るがいゝ

雲や山や美しい島が虹のやうに連つて

絶えず變化する天を戴いてまるでバラダイスだ

遙かに天に連る地平線は海のやう

飾りのやうな建築のやうな雲がコロ／＼連つて

全體の空氣は美しい鳥の翅の様に淡く染つてゐる

地上はまるで大きな花園だ。

美しい大きな都會や森や牧場がその中にひそんでゐるやう

思はず歡喜の聲をあげたくなる。

兵 隊

自分は道で側を通る兵隊に行き會つた。

練兵場から歸つて來る一箇小隊許りの一團だ

喇叭も吹かず、足並みも揃へず

彼等は黙々として重い足を引きすつて通り過ぎた。

自分は日に焼けた顔の中から一齊に自分を見て光る眼を見た。

自分ば汗が流れ入つて血走つてゐるその小さい眼の語つてゐる事をよく知つた。

彼等は話したい事がどんなに多いだらう

彼等は揃ひも揃つて立派な體格を有つてゐた

けれども彼等は未だ本當に子供らしいのぞみをその中に包んでゐるのだ

汗と埃に汚れたカーキ色の服の下には

その日焼けした手や首をのぞいて草の根の様に白い肉體を隠してゐるのだ。

彼等の母親から與へられた白い肉體をもつてゐるのだ

一九一

彼等は彼等の母親のものだ
彼等の母親を抜かして彼を所有するものはないのだ
彼等を苛酷にとり扱ふものは彼を所有する事は出来ないのだ。

自然萬歳

俺は汽車に揺られてゐる
かるくゆられてゐる
ひどくゆれる時は頭や膝を
どこかへぶつけ相に揺れてゐる
窓が一枚一枚ふるへてゐる
いやな汽車だ
けれども俺はそんな事はどうでもいゝ
俺は二三日東京へ行つてゐて今田舎へ歸るのだ。
二三日の間に自然はまるで面影を變へてしまつてゐる
實に迅速の勢ひで生長してゐる
それを思ふと恐ろしい様だ。
あの空に漂つてゐる無数の雲も

こゝから見れば動いてもゐない様だが、それでどんな速力で走つてゐるかわからない
彼處此處に森を成し、林を成してゐる樹木も
島も、

一九四

凡ての地上のものは今何者かの力に促進されて
すばらしい勢ひでどこかへ針路をとつて進んでゐるのだ。
俺は恍惚として四圍の自然を眺めてゐる

俺の世界へ又歸つて來た様だ。

胸にも頭にも力が一杯溢れてゐる

健康の自覺が歸つて來た。俺は大地の恵を呼吸してゐる。

二三日の東京滞在は何も新しい印象を與へられなかつた
淋しさと不快の印象が強かつた

どこにも救ふ事の出來ない淋しい人々がゐた。

だが見よ、こゝの自然は湯氣が立つてゐる。

この豊かさを、眩しさを

昨夜豊かに降つた雨は無意味ではなかつたのだ。

この霧と雲と日光の

變化する壯觀はどうだ。

どうだ。あの生々した豊かな島は、

熟し切つた麥は樺色の虹のやうだ。

森から森、林から林へ目を遣ると

その集合力に驚いてしまふ

霧は晴れてゆく。

風景はますます眩ゆるなる

幾皮も幾皮も剥いてゆくと

どんな神聖なものが出て來るかわからない氣がする

見よ、あの雲を

何千と云ふ數知れない形なきあの影を

皆んな薄く化粧して

大きな體を軽く運んでゐる

或ものは大きな花の房のやうに連らなつて垂れてゐる。

或ものは乳房のやうだ。

自然は何千の乳房をもつ母體だ。

雲はいつも悩んでゐる母だ。

俺は雲を見ると酔つてしまふ。雲は熱だ。

汽車は林の中を走つてゐる

すぐ窓側を緑の林がとんでゆく

葉の海の中を大きな蟲がうねつて行くやうだ。

葉から葉へ囁きが波打ち

光りと蔭が車中へ流れ込んで

人々の顔を美しくしく彩る。

こゝは美しい葉の家だ

チラリと無数の葉の中の一枚が

發育の完全な奴が大きく眼に映つて消えた

葉脈まで透き通つて見えた

驚いてしまふ。

どうして今日はこんなに驚かされるのだ

凡てが新らしい、凡てが新らしい世界を形成してゐる

自然の意圖は實に絶えず

新しいものを完成してゆくのだ。

こゝはまつたくパラダイスだ。

豊かな國だ。

眼あるものは見よ！

汝の周圍に絶えず動きうつり働いてゐる

形なき者を

その神祕な運動を見る事は自分を倦ましめない

自分を活氣つけ、自分を健康にし

自分を異常のものとしてくれる

自然萬歳だ。

あの雲と霧と日光の變化する壯麗な儀式だけ見ても大したものだ。

怪物

花を見よ

水で造つたやうなこの花を見よ

自然は怪物だ

どんな美しくしいものを造つてゐるか知れない

星の世界

1100

自分を見る

暗い地球の向ふに一杯集合した星の世界の旅行を
稀に晴れた夜それはよく見える。

絶えず大陸に近づいては又離れてゆく
移住する大きな鳥の群の様に

地球の上を蔽うて實に高いところを飛んでゆく朦朧と漂ふ空間の新世界よ、
大陸以上の他の生氣満つる世界よ

毎年今頃から秋の終りにかけて
御前達は地球の上を集合して通つてゆく

何處からどこへ行くのか知らないが
暗い雲に包まれてキラ／＼輝き乍ら

空を埋めて無數に飛んでゆく

星

星よ。

年々一度夏になるとめぐつて来て
どこかへ靜かに通過してゆく星よ

夏の夜の感慨の深い夜の世界に
御前の現はれるのは實に應はしい

晴れた夜には實に高く遠くにゐて
御前達は擧つて幽かに現はれ

生ある自分達を飾り、慰めてくれる
オ、汝不思議な諸國の星よ

御前の遍歴は今年ももう始まつた。
何と云ふ靜かさを持つて御前達は長い道を歩いて來るのか
來れ、來れ

1101

どこか知らない遠い遠い世界の果てから
悲しみの深い夏の夜のほの暗い下界に
優しい光りをもつて——臨んでくれ
母の懐にあるやうに。

二〇二

弱い奴

泣くな、妻よ

俺の膝にもたれて泣いてゐる妻よ

俺のじやうだんを聞いても

もう真に受けて泣く女よ

何がそんなに悲しいのだ。

泣くな、泣くな、俺は御前を棄てはしない。

もうじやうだんも云ふまい。

御前の眼の涙を拭つてやらう。

御前は口もきけないのだな

弱い奴！

御前が側に黙つて静かにゐてくれれば俺は十分だ。

御前も俺の側にあるだけで膝の上に縫物を散らかしてゐるだけでいいのだ。

二〇三

着物一枚なか／＼縫ひあがらなくても。
は、可愛ゆい奴！

雨後の田舎を通過して

夕日よ、夕日よ

雲の中に消えてゆく夕日よ

雨上りの夕方の太陽よ

その奇しき光りに

今地上はてらされてゐる。

空には漂ひ去る雲や霧の行列

降り足らぬ雨に大地は蒸す様だ

オ、何たる光り、何たる奇しき光景ぞ

森を成し林を成した樹木の繁茂

穀物の豊かな厚いうねり

そは虹の如く奇しき光を帯びて大きく地上にまたがつてゐる

森を貫き、林を横切り

地平線の雲と連つてゐる。

オ、壯大な雨後の雲の亂軍の通過よ

奇怪な顔々の雲よ

巨人の髯か白髪のやうに

怒れる雲よ、怒れる髪よ、纏れたる金髪の雲よ

夕日は稻妻のやうに雲を洩れて、斑らに地上に落ちて

遠い森を染めたり、島を異様に浮きたゞしてゐる。

奇怪な闇と光りの光景よ、憂鬱と光榮の光景よ

オ、大地！ 膨れ上つた六月の大地

冷たい空気に緊縮した大地

オ、太陽の子の大地！

生み殖やす大地の展り、雲の如き大地

空に漲る雲煙と死の如き大地の沈靜

森や穀物は微塵も動かない

動いてるのは雲と百姓だ

オ、日のまつたく暮れるまで働く百姓の猛烈な戦よ

濡れた青萱の中から蓑かさを着て現はるゝ伏兵の如き百姓よ

氷田に移るもの凄いな空よ

青々と並ぶ早苗の虹よ

一日の戦鬪が終へる猛烈な六月の降雨期の夕よ

遠く夕日の黄金の閃めきは戦勝を告げる

そこに大本營があつた様だ

今眩しく透いて現はれかける。

何たる異様な奇しき光景ぞ

何たる戦の宣律ぞ

巨大なるものが束になつて働いてゐる。

この莊嚴な戰場を通過して

汽車は自分を田舎へ運んでゆく

自分は窓外の闇を見てゐる

巨大な雲の山の如く横たふのを

オ、積り積つた闇を

宛ら一大群團が燈を消して露營してゐる様に

闇中には怪しいものが忍んでゐる

螢は峭兵の様に消えたり光つたりとんでゐる。

この夕の感慨よ

オ、大なる豊の感慨よ。

六月の夕

六月の夕

自分は町を歩いて遠い田舎の方でする稻妻を見た。

山の様な雲が大地の向ふに来てゐる

濛々と集團して地球の向ふに泊つてゐる

町中は全くもの音が絶えて

大地にも空にも沈黙が漲つてゐる

今にも何か襲つて来るかはひがひそんでゐる。

日が全く暮れると雲の中で稻妻はますます／＼壯んになる

音も無く爆發したり、燃えたり、あわたゞしく光つては消える

奇怪な雲の形が焔にすつかり照らされて闇の中に染め出される。

恐ろしい生氣が漲つた偉きな力が働いて居る。

何か目に見えない巨人共が地球の周りをうろついで

絶えず何か戦つたり、作業してゐる様だ。

自分は莊嚴の感に打たれて暫らく見て居た。

何十里となく連つてばつと探海燈の様に光る時があつた。

又白く燃え盡したやうな細い焰が十字架のやうにふるへ乍ら、天上するのを見た。

虹

虹よ

雨に飽満した大地が擧つて吐く太い精氣よ

しんとした森や山や大きな耕作地の上を横切つて

不思議な光りの漂ふ中に稀に現はれる瓶形の虹よ

御前は豊かに實つた穀物の蜿々とした行列や

嫋々とした草たちが地球を巡禮する無限につゞく列の先驅のやうだ

虹は又戦ひが漸つと終りに近づいて

硝煙の間から半ば揺らいで見え出した生殘者の捧げてゐる寂とした旗のやうだ。

しんとして人氣無い死の領土の上に

靜かに現はれてすぐ又倒れる様に灰色の霧の中へ捲き込れて消えてゆく

もの凄く美しくさをもつ虹よ

自分は御前が大好きだ。

恐い様な気がするけれど。

二二二

詩の朗讀

自分は興奮してホイットマンの詩を讀んでゐた。
自分の髪は逆立ち、自分の舌は滑らかになり
自分の顎はがく／＼ふるへ、全身はをどり出した。
次の間から子供はそつと側へ来て
自分の机の上に腰をかけて黙つて聞いてゐた。
その顔は考へ深く緊張してゐた。
自分はチラリと見てゾツとした。
だが自分は可愛ゆさに感動して涙ぐんだ
次の間からは妻が縫物を止めて側へ来て
眞赤な顔をして黙つて聴き入つた。
自分は自然に集つた二人の聴手を前にして
興奮の絶頂に達した。

二二三

自分は詩を止めて叫んだ。
 自分の内に眠れる獅子よ、目覚めよ
 自分の靈よ、わが舌に乗りうつれ
 自分の舌よ、火のやうに熱せ。
 自分の詩よ、痙攣して感じに漲れ
 敏感に、焰のやうに。
 オ、大なる世界にびり／＼した火の子を吐け
 星の様にきらめき吐け。

戀人よ

戀人よ

御前に會ふのは恐ろしい
 御前に會ふのは別れるのよりつらい
 何と云ふ恐ろしい喜びだ
 二人が一人となる瞬間！
 心と心の照らし會ふ時！
 あゝ御前に會ふ時位、
 俺は孤獨を感じる時はない

戀人よ

御前に會ふのは恐ろしい
 御前に會ふのは別れるより遙かに苦しい
 戀人よ

御前はさうは思はないか

母

母よ

御身は人間以上だ

神聖なる母よ

誰にとつても神聖な母よ

喜 び

二一八

喜びよ、喜びよ

自分は喜びを讚美する

苦しい生活にあるものは實に喜び易い

孤獨なものは孤獨でないのを感じる時烈しく喜ぶものだ。

喜びよ、喜びよ。御前より正しいものはない。

喜びの感情は今の世で馬鹿にされ易い

然し喜ぶ事に露骨なものほど天國に近いものだ。

喜びよ、喜びよ

オ、強まつて行け、喜びよ

至る處に隠れてゐて現はれ易い喜びよ

喜びせよ、喜びせよ

いかなる人も喜びせよ

苦しめるもの、悲しめるものは

喜びにどんなに餓ゑてゐるかわからない

あゝ喜びよ、喜びよ

喜びせよ、喜びせよ

全人類を喜びせよ

人々よ、喜ばう、喜ばう

人々よ、他人を責めず

他人を苦しめず

助け合つて喜ばう

どんな人とも助け合つて喜ばう

あらゆる職業の人よ、

人間である喜びを共にしよう

オ、凡ての人々よ

助け合はう。喜びを感じ合はう

二一九

助け合ひ、感謝し合はう
他人根性を止めよう
笑はれても、輕蔑されても喜ばう。
損をしても喜ばう
人に得をさせても喜ばう
馬鹿にされても喜ばう
泣いて喜ばう
女も子供も青年も老人も
どんな人でも一人残らず拒まれてはならない
概念や名目は消滅しろ
皆んな喜び合へるのだ。
喜び合はうよ
本當に。
どうなつたつていゝから

皆んなであゝ幸福だと感じよう
喜びよ、喜びよ
どこでもそれはわけなく感じられる筈だ。
ね、皆んな
天國はこゝにあるのだ。
皆んなよ、わけもなく得られるのだ。
皆んなよ、損をして喜ばうよ
頼むから皆んな
他人根性を出すまいよ。
オ、兄弟よ、姉妹よ
どうか喜んで下さい
喜び合つて下さい
憎み合はず、輕蔑し合はず
どうか喜び合つて下さい

どうなつても人間の價値は變りはしない
喜びよ、喜びよ

皆んな集つて来て下さる

喜び合ふ爲めに

誰一人拒まれず、集つて下さる。

大なる者

正しい人を思ふ時

哀れな人を思ふ時

自分は自分の生活を後悔する

救はれぬエゴイストの自分よ

救はれぬ卑陋な情慾の奴よ

安逸を貪る汝よ

救へないぞ。

大なるものを思ふ時、大なる存在に心打たれる時

自分は心からハンブルになる

いまはしい幻影は消え失せ心は涙にぬれる

大なる者は存在する

大なる者は働いてゐる

小さな自分は祈るよりない
オ、汝目に見えぬ大なる者よ
自分は心から悔い改め
心からハンブルとなつて祈る
大なる者よ、
大なるものゝ力よ
悪を打破る力よ
自分は汝を讚美する
自分は汝の存在を認めずにはゐられない

氷屋で

氷屋にゐると
貧しい家庭の主婦らしい人が
赤ん坊を脊負つて、荷物をかゝへて
片手で五つ位の男の子を引いて入つて来て
「氷いちごを一杯つくつてやつて下さい」と云つた。
子供は黙つて氷臺の側に立つて
氷の出来るのを見てゐた
御母さんは汗びつしよりになつて矢張り側に立つてゐた
腰かけたらよささうなものに
氣の利かない氷屋だ
「おかけなさい」と云はないのだ
だが御母さんは腰かけると脊中の子供がむつかるので、立つて、身體をゆすつてゐた

のだ。

自分は思った

「若しもこの子供の一人が病氣でもしたら

この母とこの子の父は

どんな貧しい中から薬代を出して

苦しむだらうと

自分は涙がわいた

心ですまない／＼と思つた

汽車の中で

汽車の中で母と子が乗つて居た

母は醜い女だつたが

子供が窓から夢中に外を見てゐるのを側から眺め乍ら喜んでゐた

自分が見ても笑ひを止めないで

「東京まで乗つて行つて仕舞はうか」と子供に話しかけて居た。

五つ位の子供は窓に食ひついた切り返事もしなかつた。

自分にもさう云ふ経験はある

何を話しかけても子供は聞えないふりをしてゐる。

ぢれつたいやうで、

子供が何かに氣をとられてるのを見るのは喜びだ

小
品
詩

囚人馬車

二二〇

夏の日の明るい、眞白い都會の大道を囚人馬車が走つて行く。すばらしい速力で駆けらして行く。何でも馭者は町の中は飛ぶやうに遣れと命令されてゐるらしい、その音は地上のあらゆる音の中で亂暴な音だ。側を通りすぎる時、自分は馬が狂ひ出したのでは無いかと思つた。馬車の窓には黒い紗が一面に張つてあつた。それを透かして中に二列に並んで居る罪人が見えた。皆んな好奇心を體の全體に現はして、不謹慎な態度で明るい外を覗いて居た。彼等は外からは見え無いと思つてゐるのかも知れないが、好奇心に満ちた、猛々しい心理が透き通る様に露骨に見えた。膝に手をついて體を前へのし出して馭者の背後から外を見てゐるのもあつた。あり／＼笑つてゐるのもゐた。變な顔附や不恰好な頭や又考へこんだ様なとり澄まし切つた體が見えた。すて

きな早さで眼の前を飛んで行く都會の景色を彼等は可笑しがつて喜んで居る様だ。皆んな此頃捕つた許りの新手の陽氣な罪人の一團だ。監獄の凱旋門へ向つて此世の人間を追ひ散らし乍ら愉快に乗り込んで行くのだ。通行人が皆んなおとなしく道をよけて立止つて見送つてゐる。馬車は急ぎ切つてゐるのがあり／＼わかる、ひどい音だ。乗つてゐる人の心が乗りうつつた様な亂暴な音だ。

蟬

眼の前の木に蟬が飛んで来て、留つたかと思ふとすぐ啼き出した。木の葉のやうな翅を負つて、尻を手風琴のやうに動かし乍ら、火のつく様に啼き出した。もう捕る事も恐れてはゐないやうに夢中に啼く。然し未だ啼き終らない内に物音に驚いて、急いで逃げ出した。その臆病さ、心遣ひは可愛相なやうだ。迷つたやうに留る木を探し乍ら圓く

二二一

なつて飛んで行つた。向ふの方に行つて木にとりついたと見えてすぐ又啼き出した。

踏切

太陽が落ちて間も無い、闇と暑さと埃の咽せつぽい夕暮の踏切に急がしい人が一杯せかれて居る。労働者や老人や子供や女工や小官吏や犬までゐる。うしろの方には未だ燈をつけない車や荷馬車が無数に行列して居る。皆んな早く家へ歸りたいので、苛々してゐる。汽車が通つたらすぐ歩き出相と意氣込んでゐる。まるで太陽が無くなつたので眼が急に見えなくなつた様にゴタ／＼入り亂れて混雑してゐる。その鼻先を見上げるやうな大きな汽車が、黒煙をがつかと吐いて亂暴にすばらしい速力で通る。黒い貨車が今にも線路からはづれさうにぐらぐらと曳れて幾臺も／＼飛んでゆく、柵が上げられると待ち兼ねて兩方

から線路の上に入り亂れて小群集が渡る。子供の手を引張つて行く女や出會頭をしてゐる人や尻尾を踏まれて犬が悲鳴を上げる。背後からはがら／＼と荷馬車の群がおびやかす様に動き出して来る。すばらしい活動だ。夜の世界へ皆んな追はれて行くやうだ。都會と云ふ大きな競技場から。

夜

自分は原へ来て月の出を待つて居る。原には一尺位伸びた草の中に埋れてしやがんでゐる人影が朦朧と見える。皆んな闇の中に包まれて黙つてゐる。大きな螢のやうに草の中で息をつく度びに光つてゐる。まるで風の無い暑苦しい晩だ。天にも地にもちつとも動くものが無い。茫漠と開けた闇の中に無数の星が白い墓の様に動かすに光つて列つて居る。時々その中の一つが流れるのが見える。澤山な星と星との間を

うまくくぐり抜けて遠くへ消え入る。その外には動くものは一つも無い。安らかで静かである。彼處此處に見える樹木も星から来る微光の中に皆んな優しくしだれて居る。皆んな月の出を待つて居る。

二三四

雷

雷が鳴る。自分は雷は好きでない。家中で一室へ集つた。外が眞闇になつた。氣味の悪い程自然が静かになつてしまつた。自分達は電氣の下に集つた。電氣の光りも薄いやうな氣がする。外の眞闇と静かさが、自分達をおびやかしてゐる。まるで地下室に幽閉されてゐる人のやうだ。人間らしい勇氣はなくなつてしまつた様だ。生々しない、自分は死んだ父まで思ひ出した。自分達は哀れなものだと思つた。然し雷はわりに遠いので自分は窓に立つてそつと外を覗いて見た。矢張りひどい闇だ。恐ろしく濃い動か無い闇黒だ。だん／＼空氣が緊張して

来るやうな氣がする。頭が痛み出す様な感がある。闇を破つて大きな稲妻が雲の中に燃えた。雲の層が照らされて見えた、稲妻が消える時雲の側に一つ星が紫色にきらめいて顔を出してすぐ消へた。雷はだんだん近づいて来る、大きな重いものを空へ引張り上げて轉がして来るやうな氣がする。湧き立つ雲の層に響いて聞える、種々な蟲が澤山外から家の中へ堪へられなくなつて逃げ込んで来て、障子や疊にバタバタぶつかる音が盛んになつた。手負ひの兵が隠れ家に逃げ込んで来たやうな騒ぎだ。彼奴等も外にゐるのが恐ろしくなつたのだ。何だか不穏な音だ。早く来るものなら来てくれと思ふ。生きた氣持がしない。然し雷はいつの間にか止んでゐた。あれつ切りかと思ふ。もう一つも先刻から鳴らない。未だ空も外もまつくらだ。空氣も緊張してゐる、と時を見計つたやうに冷たい風が地の底から吹き上げて来る。樂々と深い肺量をもつて、暗黒の中で巨人が息を吹きかへしたやうに吹き初める。外では木の葉が静かに揃つて溺れるやうに鳴る音がつづく、家

二三五

の中へも吹き込んで来ているくものものを溺らし飛ばす。然し風もすぐ止んだ。空も大地も黙つてゐる。それでも少し樂々した。外では人が歩き出した音がある。話聲も其處此處で聞える。小一時間も経つて時を計つた様に雨が降り出して来た。人が喜びの聲を立て、表を濡れ乍ら馳けて行く。やつと人間らしい氣持になつた。

二二六

雲の行進

道の上に立つて自分は空を眺めた。太陽は高い空の中央に異常に輝いてゐる。重い金塊のやうに少しいぶつて黒光りがして居る。その周圍の空に白い大きな雲が至る處に手にとる様に爽やかに流れてゐる。美しく強い日を一杯受けて明るくふくらんで、みどりの空を背景に鮮やかに浮き立つてゐる。氷山が海を流れて来た様に雲は四方八方から湧いて来る。どつかで一大雨降らして来たのか、これからどこかへ

降らしに行くのか、それとも餘り日がいゝので神々の衣裳を藏つて置いた扉を開けて炎天乾しをするのか、皆んな同じ方面へ徐ろに自由に進行し続ける。高い處にも低い處にも風が満ち溢れて居る。雲は風に送られてゐるのだ。風はこれだけの雲を一塊りで運送するのは重くて骨が折れるので、皆んな一群一群にちぎつて吹き送つてゐるらしい、風が吹き休むと力を失つて雲は今にも落ちて來相に運動を休んで道草を食つてゐる。風がすぐ救ひに来る、雲は一寸驚いたやうな身振りをして體をゆすつて進行を初める。まるで魂がある様だ。風は眼を四方八方に配つて、澤山の雲が衝突し無い様に、停滞しない様に天上をかけずり廻つて動かして送つてゐる。樹の天べんがこの天の運動に觸れて皆んな急がしく頭を振り動かしてゐる。地上にも天上にも何處にももの音が無い。明るくて清澄で、實に静かだ。その中を太陽と雲と風は進行してゐる。人間もこんな日には精神の流れにひたつてゐる様だ。

電車の中で

二三八

日中の電車の中で、両側に男女が竝んで腰をかけてゐる。暑いのと明るい光線の中に死んだ様に静かだ。皆んな脊が低くて體が圓い。一人として麗しく無い人はない。皆んな涼しい大きな眼を有つてゐる。眼が實に綺麗だ。皆んな向ひ合つて黙つてゐる。乾いた着物を靜かに可愛ゆく身につけてゐる。こゝには年齢が無い。後天的のものがまるで蔭をひそめてゐる。皆んなどんな人も少年からまつすぐに大人になつたやうに只美しい、此世で受けたらしい傷がない。時代の蔭も無い。これは不思議な世界の一隅だ。この世の中にかゝる美しい世界のある事を自分は喜ぶ。

眞晝

今一番暑い盛りだ。外を歩くとまるで鏡を張り詰めた室の中を歩いてゐるやうだ。地面が空に照りつけられて水晶の様に白い。見上げると太陽がすぐ頭の上にある。爛々として漂流してゐる。白い雲がその周りに亂れてゐる。非常な力で空間に押し出されてゐる。雲と太陽と風は一團の光りものゝ漂流物のやうに流れてゆく。今が一番近くこの町の上を渡御するのだ。時々風が吹き落ちて来る。その光りと風との熱と明るい嵐の襲來の中を、人が逃げ廻つてゐるのが見える。蟻が行列を亂したやうな急がしい騒ぎが生じてゐる。乗合馬車が道の最中に置いてあるか、馭者も馬丁も影も姿も見せない。中に髪の亂れた不健康相な顔をした女が只一人残つてゐた。疲れが顔一面に見える。火事の中で逃げない人のやうだ。そこらの店の男がバケツに水を汲んで燃

二二九

ゆる地面へ打つてゐた。滑稽な位急がしく、あわて切つてゐる。本當に今太陽が流れて来たかのやうだ。雲は船のあとを追ふ海豚のやうにどこまでも太陽のあとをついてゆく。跳り狂ひ乍ら。

或る秋の日

いつか暑さが減つて来て美しい秋が来た。室の中に一人であると寂しい位自然が静かだ。賑やかな所を慕うて外出し度くなる。往來は賑つてゐる。いつの間にか地上がひろくとして明るい。何の故か解ら無い、空は水が噴き上げて、満ち切つた様に動か無い、ところどころに細長い雲の白い洲が出来てゐる。日が測り難い程長く歩いてくも疲れ無い。疲れはすぐに恢復されて、自ら力が湧く。見馴れてゐるものも新しいものに珍らしく見える。日はいつまでも空に有る。夕方になる程美しい、太陽は水を打つた様な静かな空氣の上に大きく赤

く膨張してゐる。この美しい世界を閉ぢるのを惜しんでゐる。全くこの美しい世界を閉ぢるのは惜しい、戀人に別れる様に辛い、今世界は落ちてゆく日を浴びて何も彼も美しい、一寸の間だが自然がシンとしてゐる。太陽も人間も樹木もこの美に酔つてゐるのだ。

或る横丁をふと見ると赤い太陽の方へ向つて、蝸牛の様な形をした洋服の男の姿が黒く小さく見えた。彼と自分との間は千里も二千里も有る姿がする。蝸牛のやうな男はすたくと歩いてゐる。手に旅行鞆と白いハンケチを持つてゐるらしい、彼は太陽と一緒に此の地上から去つて行くのでは無いかと思へる、日本を去つて外國へ移住するので無いか、彼は何か犯罪があるらしい、彼は亡命者の様に見える、太陽の方へ向つて勇しく追手の方を振りかへつて真黒な口で喚き乍ら歩いて行く。

往來はだんく人足が繁く、然うして急がしくなる。空には萬國旗の様に青地の空に雲が彩色され、蜻蛉がスイくとんでゐる。人足、

左官、大工等が都會の方から盛んに遣つて来る。

二四二

道端には子供を抱いた母親が路次の奥から出来て、通りかゝりの女と顔を睨めつこして話してゐる。手の上の赤ん坊は裏店の暗いところから空気のいゝ明るい往來へ出て來たのを喜んで、體をのり出し、口から水のやうに涎を垂らし、兩手を龜の子の様に宙に泳がして運動してゐる。この運動で抱いてゐる母の體はよろ／＼してゐる。大きな實にゆすぶられてる幹のやうだ。然し二人の女は話に夢中だ。眞劍だ。自分の家では日が暮れない内から子供は眠る。いつも時間が變ら無い、夕飯もろくに喉へは通ら無いほど疲れてゐるのだ。茶碗も箸も持たたまゝコクリ／＼と遣り出す。星がチロ／＼空に出て來た様な氣がする。日は全く沈んで夕闇は靄の中から襲つて來る、空地の子供等は去り木々に雀が集り來りだん／＼に家の内と外とがいやに遠くなり、樹木は魁偉な姿となり、晝間はだまされてゐた氣がする。妻は電氣の紐をぐ／＼と音をさせて低くして縫物を初める。外には虫が頻りに勢

のいゝ羽をふるはしてゐる。あゝ静かな長い夜が來た。夫と妻は顔を見合はして久しぶりの様な氣がする。見馴れて居る顔が不思議に今夜は美しく、懐しい、顔色までも輝いて居る。千里も二千里も離れて居たのが急に會つた様な感がある。二人は太陽の中で會つたのだ。夜は靜かに更けて行く、

表へ出て見れば未だ宵の口だ。三日月が空に燃えてゐる。二つの影が眼の前を歩いて居る。力強く手に手をとつて、強相な肩と肩を並べて押しつけこして、男は帝王の如く、女は皇后の如く、星の様に暮れた許りの淡い光りを發す地上を歡喜に燃えて散歩してゐる。道端の社の前を通ると、奥深い拜殿には宵の燈明が澤山ともつて胸打たれる様に美しく、靜まつて行く夜の空氣の中に燈は何事も無く平和に美しくともつてゐる。彼等の眼にその燈は歡喜に燃え、奥深い靜かさは宛ら彼等を祝福してゐる様に見える。二つの影は云ひ盡せない喜びに胸打たれつゝこの美しい時間を消すのを恐れて歩いてゐる。先刻か

三四四
ら彼等は幾度も同じ所を歩いてゐる。何處かへ行つては又出て来る。彼等は人々が指し笑つてゐるのも眼には入らない。もう喜びは燃え盡くして、今度は悲しみに襲はれ乍ら一層強く抱き合ひ乍ら歩いて行く、暗く燃えつきて消えてゆく三日月の方へ、あゝ夜、不思議な緊張した夜。眼と魂が一致する時、郵便局へ入ると金網の前に二三の男女が切手を買つて居た。その汚ない衣服を着た人間も變に偉大だ。往來してゐる人は皆んな贅澤な光りを發してゐる。自分の眼はもう自分のもので無い、奥深いところから何かと窺つてゐるのだ。自分の眼の前に在るものは凡て靜かにその光りの中に並んでゐる。

—了—



大正八年八月廿八日印刷
大正八年九月六日發行

(定價壹圓拾錢)

◀ 虹 ▶

著作者

千家元麿

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地

新潮社

電話番町 (長) 八〇九番
振替東京 一七四二番

印刷所

東京市神田區宮本町五番地
電話下谷 四〇六七番

新潮社印刷部

(印刷者)

高橋治一

□ 泰西名詩選集 □

世界第一の戀愛詩集、始めて口語の新體に譯せらる

■ ハイネ詩集

生田春月氏譯

(第十版)

定價 八拾五錢
郵送料 六錢

「古今を通じ、世界に亘りて、ハイネに匹敵すべき、甘き情熱の音楽はあらず」とは、イチエの語也、ハイネの名は、青春子女の憧憬措く能はざるもの、其の詩殆ど皆戀のなやみを歌ひて、濃艶薔薇の如く、可憐董に似たり。生田春月氏、今、獨の原語に就き之を流麗雅馴なる口語體に譯す。收むるところすべて三百有一篇、ハイネの各方面を盡くして遺憾なく、殆ど其の全詩集と稱するに足るものあり。

■ ホイットマン詩集

白鳥省吾氏譯

(第六版)

定價 八拾五錢
郵送料 六錢

近代民主詩人の代表者たるホイットマンの全作に亘り、其の粹を譯出す。白鳥氏は、此の詩人に傾倒すること久しく、大なる憧憬と興味とを以て、反譯の事に從へり。

■ ゲエテ詩集

生田春月氏譯

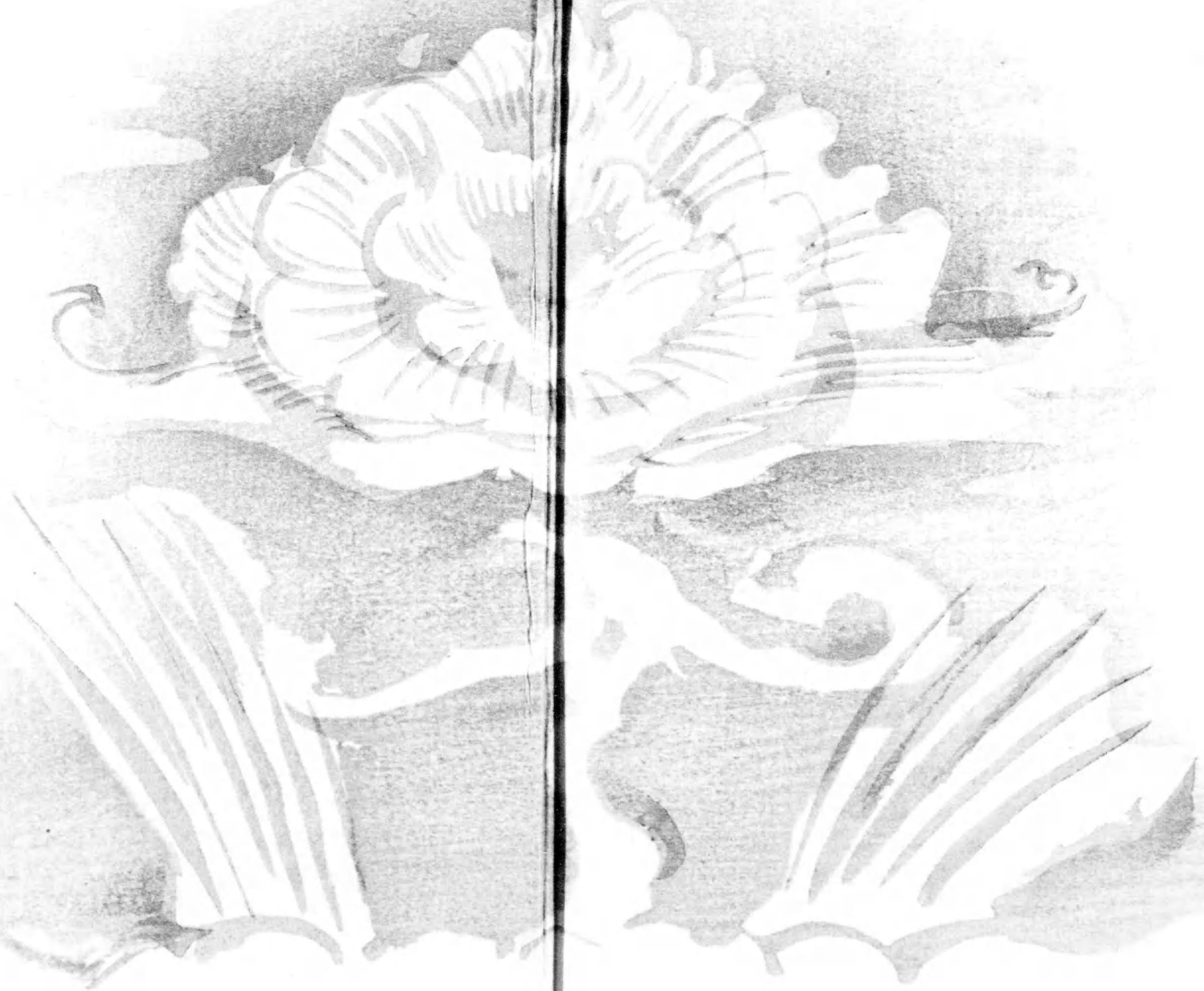
(第六版)

定價 八拾五錢
郵送料 六錢

ゲエテは世界的大詩人、その詩悉く「大いなる懺悔録の一節」也。寔に人を動かすこと斯くの如きは稀也。生田氏今慘憺の苦心を重ね努力半歳にして漸く本譯を全うせり。

□ 新 潮 社 出 版 □

119
1633



終

